『就実教育実践研究』第10巻　抜刷
就実教育実践研究センター　2017年３月31日　発行

幼児期における表現教育

― ゆかり文化幼稚園を訪問して

A study on expression education in early childhood
“a report on visitations of Yukari Bunka Kindergarten”

秋　山　真理子

幼児期における表現教育
― ゆかり文化幼稚園を訪問して

秋山真理子（幼児教育学科）

A study on expression education in early childhood
“a report on visitations of Yukari Bunka Kindergarten”

Mariko AKIYAMA（Department of Preschool Education）

抄録

本稿は、幼児期における表現教育について、より良い表現教育とはどのようなものかを考えていく一つの契機として、表現教育を特色とする、ゆかり文化幼稚園を訪問し、その報告をするものである。初回の訪問では、園長先生からお話を伺い通常の園生活における子どもの様子を見学して、子どもの生き生きと表現する姿に新鮮な驚きと感動を覚えた。その後のスポーツショウ、造形展という表現教育を大切にする園ならではのものの見学を通して、保育者に求められるものは、音楽・美術（図画工作）・体育の基礎力のみならず、それらを柔軟な発想で関連付け、組み合わせていく保育の力であると確信した。

キーワード：　表現教育、オペレッタ、弘田龍太郎、ゆかり文化幼稚園、教育方法論

Ⅰ　はじめに

現在、幼児教育において、音楽表現、造形表現、身体表現は、「表現」という一つの領域を構成している。幼児教育の現場においては、３つの要素がどのように関わり合って行われているのか、望ましい表現教育とはどのようなものなのか、筆者が担当している「表現Ⅱ（音楽表現）」の授業の中で学生に対してどのように指導していくのがより望ましいのか、との思いを日々巡らせてきた。作曲家である弘田龍太郎の童謡の研究をきっかけに、彼が創設した、表現教育を特色とする「ゆかり文化幼稚園」（東京都世田谷区）の存在を知り、2016年５月に通常の園生活と園庭発表会の準備、９月に「スポーツショウ」、11月に「造形展」の見学をさせていただいた。

そこでは、日常の園生活の中でごく自然なかたちで音楽表現、造形表現、身体表現が一体となった表現教育がおこなわれ、のびのびと子どもらしく自己を表現している子どもたちの姿に新鮮な驚きと感動を覚えた。

以下に、訪問内容を報告し、幼児期における表現教育の在り方をあらためて考える契機にしたいと思う。

Ⅱ　幼稚園の概要

ゆかり文化幼稚園は、大正期から昭和初期にかけて多くの童謡や歌曲等の作曲家として高名な弘田龍太郎（1892－1952）が、幼児教育の必要性を感じ、日本の幼児教育の第一人者である倉橋惣三（1882－1955）に助言を求め、画家、音楽家である娘夫婦と共に1947年に設立した。教育者・哲学者・声楽家・作曲家・彫刻家・画家・建築家・教育学者・幼児教育者・童話作家等の多くの高名な文化人たちの協力も得て開園した幼稚園であり、特に「表現教育」を重視している点が特色である。

現在の建物は、世界的な建築家である丹下健三氏が、幼稚園の園舎の設計という未知の世界に強く興味をひかれ､園における子どもの日常をつぶさに見た上で自ら設計を担当し、1967年に完成させた。高台に２階建ての園舎を建て、園庭との間に高低差のある変化に富む環境を作り出している。（写真１）

園舎は高台に建っているため、園庭から眺めると、３、４階の高さにあり、園舎からは園庭や周りの家々、木々の緑が眼下に一望できる。1964年の東京五輪で造られた丹下健三氏設計の代々木体育館と同様、屋根はタングステンで吊り下げられ、柱のない斬新な構造になっている。また、子どもの座る椅子も丹下自身がデザインし、すわり心地が良く、軽くて丈夫で安全で、重ねやすく片付けやすい椅子は、現在も使われている（写真４）。

園舎から園庭に降りるために階段とすべり台が作ってあり、その横には噴水のある池が配置され、外国を思わせる雰囲気を醸し出している。すり鉢状の底に園庭があり、周りは斜面になっていて多くの木々が植えられ、その中には小屋が作ってあり、子どもたちの隠れ場所や夏場の日除けの場所にもなっている。園舎と園庭には高低差があり、地面は園庭に向かって斜面になっているので、子どもは無意識のうちに、足の裏をしっかり地面に踏ん張ってバランスをとって歩くようになり、自然に足腰が鍛えられるのではないかと思われる。園庭は大変広く、砂場・ブランコ・ジャングルジム・うんてい・鉄棒等が園庭の周りに配置され、園庭の中央には200名以上の園児が全員で走り回って遊べるほどの何も置かれていない広い空間が確保されている（写真２）。訪問した日も、登園して保護者と別れた子どもたちは､階段を上りトンネルをくぐり抜けて保育室や園庭に向かい遊んでいた。

Ⅲ　園児の日常の姿

１　登園後

こどもの園庭で走り回る運動量の多さには驚かされた。3,4,5歳児が入り乱れて鬼ごっこやかけっこをしたり、そのうちに陣取りゲームに変わったり、その中に保育者が入って瞬く間に白線を引いたり動物の絵を描いて陣地を作る等、さりげなく遊びを発展させていく姿があった。

園庭の隅には、てんとう虫・ちょうちょう・ひつじ・うさぎ・ひまわり・たんぽぽ等の

虫・花・動物のキャラクターのかぶりものと背負えるように作られた羽等が、遊び道具としてホックにかけてあり、子どもたちが、その日の気分に合うキャラクターのかぶりものをかぶり、あるいは背中に羽をつけて、そのものになりきって飛び回って遊んでいた。子どもと同じように虫などのかぶりものや羽をつけた保育者が、飛んだり跳ねたりしながら子どもたちを表現活動へと導き、子どもたちが保育者の動きをまねながら楽しそうに遊ぶ姿が大変印象に残った。あそびの途中で気分が変わり別のかぶりものを選び直す子どもやお気に入りのものを一日中身につけている子どももいた（写真３）。

写真１：高台に建つ園舎（丹下健三設計）

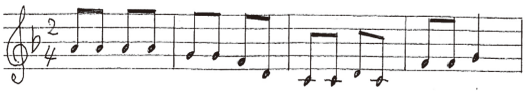
写真２：広い園庭（園舎からの眺め）

写真３：かぶりものをつけてあそぶ年少児

２　朝の集い

１）園歌の歌唱

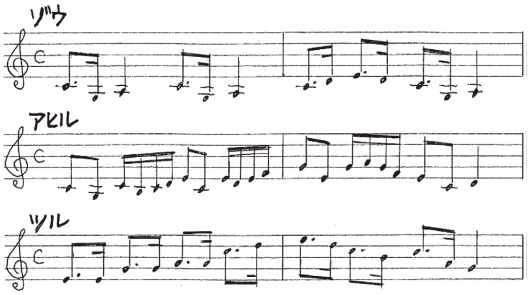
平易な優しい歌詞に「四・七抜き音階」を用い、弘田龍太郎らしい親しみやすい旋律が付けられた、16小節の短い園歌には、数多くの童謡を作った彼の、子どもの気持ちにしっくりくるような歌いやすく覚えやすい園歌を、との心くばりがなされているように感じられた（楽譜１）。



楽譜１

２）動物体操

さまざまな動物の動きに合わせて作られた短い旋律をつないで体操の曲ができている（譜２）。その流れは次のようである。両手を左右に振って飛びかかるようにジャンプ → ゾウになって手を下に伸ばして左右に振る



楽譜２

→ アヒルになって腰をかがめ鳴き声をまねしながら前進と後退をくり返す → サルのまねで片手ずつ上下させてからしゃがむ → ツルになって羽ばたきながら跳ねる → 足ぶみしながら右回り等。

このように体の各部分をまんべんなく動かすように考えられた一連の動物の動きを２回繰り返す。程良いテンポで動物のまねをするシンプルな体操なので、年少児も飛んだり跳ねたり手を広げたりしゃがんだりと楽しそうに動いていた（楽譜２）

３）童謡に合わせた身体表現

中田喜直作曲の童謡《こりすのふうせんりょこう》が、子どもたちの歌声によってスピーカーから流れ、それに合わせて目の前の子どもたちも歌いながら踊っていた。園には多くの踊れる童謡が用意され、いたるところに表現活動が組み込まれており、音楽に合わせて表現することが日常の園生活の中で自然に身に付くようにできているようである。

４）朝の集いが終わると、それぞれが階段を上ったり倉庫の上を駆け上がったりと変化に富み起伏に富んだルートを通って保育室に一目散に散っていった。毎日走り回って遊んでいるせいか、どの子どもの動きも大変機敏に感じられた。

３　保育室

園舎は築50年で古くはあるが、保育室は広く落ち着いた色合いで作られ、其処彼処に建築家と園の先生方の子どもに対する思いが感じられた。この日は父の日のプレゼントのメダル製作であったが、椅子も机も色々な方向を向いて置かれ、各々が好きな場所にすわり自由に作業を楽しんでいた（写真４）。

また、保育室や園舎内の壁や棚の上などいたるところに、こどもたちの絵や泥ねんどの作品等が、小さな作品から共同製作の大きな作品まで、美術館の芸術作品のように大切に展示されていた。保育者の作った壁面製作等はあえて飾られておらず、子ど

写真４：丹下デザインの椅子と子どもたち

写真５：廊下に展示された作品

写真６：廊下に展示された作品

もの作品に限定されていたのが印象的だった（写真５．６）。

Ⅳ　スポーツショウを見学して

園からのご案内をいただき、９月に創立70周年記念の第70回「ゆかりスポーツショウ」を、開会から終了まで（朝から昼休憩を含む約５時間半）見学することができた。

起伏に富む園の園庭をぐるりと囲む斜面や高台に保護者はそれぞれに座り、子どもたちの活動を見守った。白い体育着にそれぞれの組の色のたすきをかけた子どもたちが入場行進し、年長組が布を張り合わせて作ったサイの大きな旗が、ファンファーレと共に子どもたちの手によっておごそかに掲揚された（写真７）。園歌斉唱と春の一日視察でも見せてもらった楽しく体全体があたたまる「動物体操」（写真８）が終わると、軽快なルロイ・アンダーソンの《トランペット吹きの休日》にのってかけ足で退場。いよいよ始まりである。

演目は、全部で23あり、それぞれに楽しい名前が付けられていた。午前の部は、年少組が、「競技」「造形」「自由表現」に、年中組は、「競技」「造形」「舞踊劇」に、年長組は、「フォークダンス」「個人競技」「集団競技」「全員リレー」「造形」「オペレッタ」に登場した。午後の部は、卒業生のリレー、親子での競技やフォークダンスというプログラムだった。プログラムの中に「造形」「自由表現」「舞踊劇」「オペレッタ」があるのが、他の幼稚園には見られない、ゆかり文化幼稚園の大きな特徴であり、運動会ではなく、スポーツショウと呼ぶ意味がここにあるのであろう。使われる曲も、流行の音楽やテレビから流れてくるアニメの音楽等ではなく、アンダーソンの数々のポップな曲や、湯山昭のピアノ曲《いいことがありそう！》《シュー・クリーム》、ハワイアンソング、《ラデッキー行進曲》《くるみ割り人形》、モーツァルトの弦楽四重奏曲、吹奏楽の名曲等々、多岐にわたり、子どもの動きや演目に合わせ吟味し選び抜かれた、明るく軽快な曲、うきうきする楽しい曲、流れるような美しい曲の数々であった。

１　競技

１）年少組

板に紙を貼って作った大きな木になっているリンゴやクリや梨の実をもいで、ゾウ・ゴリラ・キリンの前に置かれた籠の中に入れて向こう側の保育者にタッチして終了というもの。速さを競うことなく気分に任せて好きな果物の木の下までトコトコ走り、思いっきり手を伸ばして実をとり、動物の前に置かれたエサの籠に入れるためにしゃがむ等、基本的な動きをしつつゴールするという無理のない変化に富んだ工夫がなされていた。

２）年中組

２組に分かれて競技があった。両方とも簡単な障害物競走になっていて、片方の組は、子どもが草むらをとびこえ、ネットで作ったクモの巣の下をくぐり、向こうの森にい

る好きな虫をつかんで、ふたたびクモの巣をくぐり、草むらをとびこえて戻ってくるというもの。もう一組は、雲をとびこえ星をつかんで戻ってくるというもの。ここでも子どもが年少児よりも、さまざまな動きに興味を持って取り組めるよう工夫が凝らされていた。

3）年長組

「フォークダンス」が加わる。男女が手を取ってまわり、輪の外側の女児がスキップのリズム♫♫♫でまわっている間、内側の男児は「タ・タ・ター」のリズム♪♪♩でとなりのお友達と手を合わせるというリトミックの要素が含まれている（写真９）。

「ゆかりんぴっく」は、年中組よりも動きの要素も複雑になった障害物競走だったが、坂道を上るところでは、自力でかけ上がれない子どものためにロープが垂らしてあったり、跳び箱が苦手な子どもでもできるように高いものと低いものが用意されていたり、まっすぐに走るのではなくラグビーボールを持って人形の間を蛇行しながら走ったりと、運動の得手不得手が出てくる年長児への配慮も随所に見られ、ラストは平均台を渡って終了という遊びの要素が満載の楽しい競技であった。

「玉入れ攻防戦」は初めて目にする面白いものだった。紅白に分かれるのだが、籠に玉を入れようとする組に対して、もう一方の組はなんと、大きなうちわを持って飛んでくる玉を入れさせまいとはたき落とすのである。籠に入れようと投げる子どもと入れさせまいとはたきおとす子ども、両方の別々の体の動きを体験しながらの両者の必死の攻防戦であった。妨害されながらも多くの玉が籠の中に入っていた。

年長組全員で次々にバトンタッチしていくリレーは、速いも遅いも関係なく、とにかく一生懸命に走っていた。日常の園の活動の中でよく走りまわっている園児の様子が想像できるように、そろって足が速いのに驚いた。

写真７：園児の作った旗が掲揚された

写真８：動物体操（あひるの動き）

写真９：年長組のフォークダンス

2　造形

この演目が運動会の中に入っているのが、ゆかり文化幼稚園の特徴の一つである。

1）年少組

グランドを海に設定し、よーいどん、で泳ぐまねをしながら中央に貼られたひもに自分たちで作った、さかな・いか・たこ等の海の動物を吊り下げ、再び泳ぐまねをしながら戻り次の子どもに交替、という競技。中央いっぱいに魚がつりさげられ、みんなの作品がグランドにゆれてそこは海へと変わった

2）年中組

南の島の製作。よーいどん、でハワイアンソングにのってグループごとにそれぞれに島に作られた筒の中に、自分たちで作った花や木や実を刺し、ヤシの木や赤い花の咲く南の島を作り上げていった。グループに分かれて競い合い、より早くより上手に作り上げていくドキドキ感もあり、出来上がった作品が舞台の背景になり、その中で子どもたちは歌を歌い踊った。このような活動がやがてオペレッタにつながっていくのだと思う。

3）年長組

より規模が大きく、自分たちの手作りの草・木・花・岩・実などを運びこみ、はりぼての土台につき差し、貼り付け、組み立てていき、それは見る見るうちに、バナナの木・大きな滝・ラフレシアの花・マングローブの森などになり、園庭の中央に大きなジャングルが出現した。その出来栄えは、保護者の歓声が上がるほどの力作だった。自分たちの作ったものが集まって、屋外の広い空間で立派な作品になり、みんなに賞賛されたという体験は、子ども心に大きな達成感と満足感を与えたことと推察される（写真10）

写真10：年長組の造形「ここはジャングルの中」

3　自由表現・舞踊劇・オペレッタ

写真11：年少組の自由表現

写真12：年中組の舞踊劇

これらの演目こそが、ゆかり文化幼稚園の一番の特色であり、子どもの表現する能力を、あそびから段階を追って「自由表現」「舞踊劇」「オペレッタ」へと育て上げていく保育の一端が展開された。

1）年少組 《夏の原っぱで》

「自由表現」と名付けられたもので、これがオペレッタへの第一のステップであろう。一日訪問をした際に、子どもが園庭に置かれた色々な種類の動物や花や鳥のかぶりものをかぶって遊んでいた光景が思い出された。「子ども達の遊びの中から生まれました」とプログラムに副題がついているように、とんぼ・くま・せみ・ぶた・ひまわり・かぜ・ほしのかぶりものや羽を付けた子どもたちが、あの時のあそびそのままに、とんだり、はねたり、まわったり、走ったり、手を広げたり、と色々な動作を繰り広げている。その子どもの動きと保育者のナレーションとで物語が出来上がっているのである。自分の好きな役の格好をして、この日のためにではなく、いつも通りに跳びまわっているのだから子どもの姿は自然そのものだった。それぞれの役の先頭に立っている保育者も、多くの保護者に見られていること以外はいつもどおり楽しそうに飛び跳ねていた。「あの日の遊びがここにつながっているのだ」と大いに納得がいった（写真11）。

2）年中組 《宇宙から海の中へ》

「舞踊劇」と名付けられ、海の中へロケットが飛んでくるという物語展開のあるものになってくる。ロケット、サメ・トビウオ・カニ・かめなどの役になって衣装を着けた子どもたちが、音楽に合わせて踊る様子は、年少組と似てはいるが、全体の表現の多様さ、ダイナミックスさ、スピード感、集団での統一のとれた動きなどは、子どもの１年間の成長を感じさせるものであり、年長組の「オペレッタ」へつながっていくと思われる（写真12）。

3）年長組 《ジャングルへとんできたベニスズメ》

年長組になると、作詞作曲、構成演出の付いた歌による対話、歌と踊りの劇、つまり「オペレッタ」へと発展する。今回は、弘田龍太郎の娘で第３代園長の藤田妙子作詞作曲のオペレッタであった。前述の造形の種目で作り上げた、バナナの木・大きな滝・ラフレシアの花・マングローブの森などのジャングルが、ちょうどオペレッタの舞台装置になっている。劇の中でも子どもたちの手作りの小道具が数多く使われていた。

あらすじはジャングルを舞台に、そこに住む色鮮やかな鳥（写真13）とたくさんの動物が登場し、日本から海を越えてあそびにきたベニスズメ（写真14）を喜んで迎えようと、パーティーの準備をするという、途中に展開はあるものの全体に子どもらしい楽しく温かい内容のシンプルな劇である。それぞれの役の子どもたちが、色とりどりの衣装を着け集団になって順に登場し、セリフはなくすべて音楽に合わせて歌ったり踊ったりしながら劇が進んでいくのである。園庭の中央で演じる役の子どもたちと周囲から歌いかける役の子どもたちがいて、どこが正面ということなく野外円形劇場の

ように360度すべてに向かっての表現という事になるが、先頭で演じる保育者と共に、おもいっきり走り、まわり、とび、鳥は美しく羽ばたき、ライオンは勇ましく、ゴリラはおどけて、シマウマは勢いよく走り、等々、それぞれのキャラクターになりきって体中で表現し演じていた。

５月に園を訪問した際に、園長先生がオペレッタについて、「子どもたちのごっこあそびから自然にオペレッタに発展していくのです。」「それぞれの役を集団で演じ、特定の子どもだけが目立つような主役は作らないようにしています。」というお話をされていたが、目の前に繰り広げられているのは、まさに保育者の子どもへの配慮の行き届いたそれであった。役の子どもたちが登場して歌う声にかぶって、録音された子どもたちの歌声がスピーカーから同時に流れるのは、子どもたちが歌う事に気を取られ体の動きが小さくなってしまわないようにとの配慮と同時に、野外で演じるための補助的な役割も果たしている。

写真13：年長組のオペレッタ

写真14：年長組のオペレッタ

子どもの動きや踊りは思い思いの表現であり、そろった動きになっていないところはそれはそれで良いのである。また、集団で役を演じている時に、ひとり立ったまま動かない子どももいる。たとえ見た目には動いていなくても、心の中では、それぞれの役の美しく、すてきな、かっこいい衣装や、かぶりものを身につけて登場するだけで、いつもの自分とは違うものに変身する、いわゆるごっこあそびの楽しさは感じとっている、と保育者は理解し認めている。「保護者に成果を見せるためにやっているのではなく、子どもたちが美しいものを美しいと感じ、集団行動に慣れ、表現することを何だか楽しいと感じてくれればそれでいいのです。」と園長先生は話されたが、その意味でも、すべてのこどもが違和感なく溶け込んで一つの楽しいオペレッタの世界を作り上げていた（写真15）。

写真15：年長組のオペレッタのフィナーレ

園庭でくり広げられるこのような表現活動の中で、子どもたちは、体を動かし、歌を歌い、自分をのびやかに表現し、解放していくことの楽しさを覚えていくのだと思う。

４　その他

午後の部は、家族で一緒に楽しめるプログラム（卒業生のリレーや親子一緒の競争、大縄跳び等）が並んでいた。フォークダンスは、ゆるやかなテンポのシンプルな動きの反復で、年少組の子どもも楽しそうに親子で踊っていた。スポーツショウの終了後の子どもたちの大興奮した様子から、やりきった満足感と楽しさが伝わってきた。園長先生は一日中腰かけることもなく、子どもたちのそばにずっとついて、優しく声をかけ関わっていらした。園長先生のそのような姿と、保育者の方々のきびきびとして、しかも美しい動きや、子どもを表現活動へと導いていく熱心さに心から感動した。

Ⅴ　造形展を見学して

11月の終わりに「造形展」の見学のため再度園を訪問した。子どもたちが日々の園生活の中で作った個人作品と協同作品が２日間に渡り展示された。作品は、さまざまな手法を用いた水彩画や木炭画と、紙・粘土・布・木などを用いた工作である。保育室や廊下・ホールに流れる静かな美しい音楽、保育者の工夫とセンスが光る展示、作品に添えられた丁寧な説明、それらに包まれて、子どもたちの作品は、どれも見応え十分、美術館の芸術作品のように輝いていた。圧巻は、舞台上に展示された年長組の協同製作「ジャングルとジャングルの仲間たち」であった(写真16)。スポーツショウで演じたオペレッタを発展させて、新たに自分たちで調べ、アイデアを出し合い工夫し協力して作り上げた巨大なジャングルの展示は、子どもたちの思いが詰まった夢の世界であり、その中で見学に訪れた子どもたちが、思い思い好きな動物の衣装を着けて遊ぶ姿は、オペレッタの情景を彷彿とさせた。

造形からオペレッタへ、そしてその印象を再び造形化することでこのオペレッタは、より強く子どもの心に残っていくのであろう。表現教育によって子どもの限りない可能性が引き出され育つ様を今回も見ることができた。

写真16：ジャングルとジャングルの仲間たち

Ⅵ　おわりに

園では、春には簡単な振りの付いた表現を演じる「園庭発表会」、秋には「スポーツショウ」と「造形展」、年度の終わりには園舎内の舞台で子どもたちが歌い演じるオペレッタや簡易楽器の合奏等を発表する「文化祭」というように１年間を通じての表現教育のプログラムが作られており、これが年少組から年長組まで３年間に渡って繋がっていくのである。「表現教育こそが幼児教育の根幹をなすもの」との強い信念がそこには貫かれている。あくまでも日々の園生活の中で繰り広げられる子どもたちのあそびを大切に、その中から生まれる表現の芽ばえを見逃さず大切に育てる教育の中で、子どもたちの想像力･創造性･社会性・表現力・豊かな感性・集中力・言語能力が育っていくのであろう。表現教育を受けたこの園の子どもたちは、それが学ぶ力となり、成長と共に各分野で能力を発揮していくそうである。

子どもの自発的活動を中心としたあそびの価値を大切にする保育方法を実践した倉橋惣三とほぼ同時代を生きた弘田龍太郎は、大正デモクラシーの自由な空気の中で、赤い鳥の童謡運動に参加し、子どもの美しい空間や純な情緒を優しく育むような芸術味の豊かな多くの童謡を作曲した。ゆかり文化幼稚園には、倉橋惣三のあそびが、弘田龍太郎から始まる代々の芸術家の園長先生のもとに、音楽を始めとする表現教育という立場で実行され生きている。

今回の訪問では、日々の練習を繰り返す中で身に付けたと思われる保育者の体のしなやかで美しい動きや身体表現のレベルの高さにも驚かされた。表現教育を行うにあたって、保育者が、音楽・美術（図画工作）・体育の３つの柱のそれぞれの基本・基礎力をしっかり身に着けていることは当然ながら必要である。加えて、保育者に求められる最も大切なことは、子どもの興味・関心を惹きつけ、子どもの意欲を伸ばし、子どもの表現力を育てていくために、それらをどのように組み合わせ展開していくかという発想の柔軟性や創造力･構成力･表現力である。今回の訪問を通して上記のことを改めて確信することができた。

謝辞

このたびの報告文を作成するに当たり、ゆかり文化幼稚園 藤田厚生園長先生には、お忙しい中を懇切丁寧な説明と共に園内を案内していただき、また、園名・写真の掲載にあたりましても、快く許可していただきました。ここに深く感謝申し上げます。

参考文献

ゆかり文化幼稚園 編／須藤恵美 選　踊れるこどもの歌 ⅠⅡⅢ　ゆかり文化幼稚園
日本童謡協会 編　1985　日本の童謡200　音楽之友社

畑中圭一 著	2007	日本の童謡 誕生から九〇年の歩み	平凡社
印牧季雄 編（弘田龍太郎 作曲）	1928	童謡遊戯　落葉の踊り	京文社
久保富次郎 著	1929	唱歌遊戯と新舞踊	教文書院
弘田龍太郎 著	1936	作曲の初歩	岩本書店